

翻訳

アーニャ・ザレヴスキー著

「ヒトラーのじじいなんか死んじゃえ！」

イギリスへのユダヤ人児童移送（キンダートランスポート）の回想

——著者による「解説」——¹⁾

訳：中村 実生

「たった一つの命を救う者が、全世界を救う。」

(『タルムード』²⁾)

「ヒトラーのじじいなんか死んじゃえ！」——十四歳のエーファ・ハイマンは、列車がドイツ国境を通過し、突撃隊員による陰険な審査がようやく終わりを告げたとき、窓からそう叫んだ。彼女は、一九三八年と三九年、他に類を見ない救援活動によってナチ政権から逃れたおよそ一万の子供の一人だった。一九三八年十一月の〈帝国ポグロムの夜〉³⁾以降、イギリスはユダヤ人児童の入国を無制限に許可することを決定した。ただし、入国を許されたのは児童のみ、両親は許されなかった。それでも数知れぬ父たちや母たちは、ますます耐え難くなっていくドイツでの暮らしから我が子を逃れさせようと、重い一步を踏み出す決心をした。

イギリス内閣が児童移送受け入れの決定を下したのは、多くの国が移民制限の政策を進めてユダヤ人流入を阻止していたさなかであり——当時両親たちには、自分らの子供とは違い、いつかドイツをあとにできる見込みはごくわずかしかなかった。

最終的に児童移送の実現に決定的影響を与えることとなった〈帝国ポグロムの夜〉は、長い間つぎつぎと起こっていた人間蔑視の行為の頂点をなし、こうした行為の目的は、ユダヤ系市民を社会から締め出すことだった。とはいえ注意深い観察者であれば、もはやユダヤ人にとってドイツでの未来はないだろうということは、すでにヒトラーが政権を掌握した一九三三年一月の時点で予測できた。政権が反ユダヤ主義的なのは、一目瞭然だった。

早くも一九三三年四月一日、すなわち国家社会主義ドイツ労働者党が勝利⁴⁾した数週間後に、ナチは初めてユダヤ人商店の帝国全土でのボイコットを呼びかけた。突撃隊員と親衛隊員はショーウィンドウになぐり書きをし、買い物客を妨害した。彼らが配布したビラには、次のような反ユダヤ主義的スローガンが書かれていた。「ドイツ人よ、防衛せよ！ ユダヤ人商店で買い物をするな！」

これに続いたのは、ユダヤ人を経済的、社会的、文化的な生活から追放するための幾つもの措置だった。一九三三年四月七日公布の「職業官吏制度再建法」は、「アリア人条項」とともに、すべての国家公務員に自分がアリア系であることを証明するよう求めた。四分の一以上ユダヤの血を引いている公務員はすべて免職された。当初、帰還兵はこの規則の適用から除外されたが、それも最初のうちだけだった。政府の圧力を受けた官庁や地方自治体は、ユダヤ人排除状態になるよう努力した。次に続いたのは、数々の職業禁止だった。また、ユダヤ人大学生の数も制限された。そしてついには一九三八年十二月六日から、ユダヤ人はもう大学で学ぶことができなくなった。

クラブや学生組合の多くも、すでに一九三三年にはユダヤ人をメンバーから閉め出した。

一九三五年九月十五日、「ニュルンベルク法」が採択された。そこに含まれていた「ドイツ人血統保護法」によって、「ユダヤ人とドイツもしくはそれに近い血統を引く国民との婚姻および婚姻以外の関係」が禁止された。帝国国民法の定めでは、ドイツ帝国国民と認められるのはドイツ人もしくはそれに近い血統の者だけだった。

ドイツのほとんどすべての市町村に、悪名高い「シュテュルマー掲示板」があった。プロパガンダの手段として、これはきわめて効果的だった。ユーリウス・シュトライヒャーの煽動新聞『シュテュルマー』は、最も売上の多かった一九三五年には発行部数およそ五十万を数えた。しかしながらこの新聞は、掲示板で遥かに多くの読者を得た。毎号の一面に大見出しとなって踊るのは、「ユダヤ人は我々を滅ぼす！」という言葉だった。人種憎悪とポルノグラフィの混合は、下等な本能に訴えかけることとなる。多くの子供たちも通学途中に「シュテュルマー掲示板」の前を通り、連日煽動的スローガンを吸収した。この新聞の好みは過激で露骨な表現だった。ユダヤ人は「寄生動物」や「民族を墮落させる者」、「病原菌」、あるいは「害虫」として描かれた。年ごとにこの新聞は密告者による糾弾の場を呈してきた。編集部に寄せられる投稿は日々七百通にもぼった。そこで熱心な国民同胞たちは、誰がユダヤ人商店で買い物をしたか、誰がユダヤ人との付き合いを断ち切っていないかを、事細かに並べ立てていた。それどころか多くの読者はわざわざ写真を送って、身近に起こったその種の「犯罪行為」を摘発しようとさえした。『シュテュルマー』はそういう投稿や写真に正しく報いるための欄まで作り、それを『さらし台』と名付けた。誰かがユダヤ人の隣人と散歩しただけであっ

でも、『シュテュルマー』では「ユダヤの僕^{しもべ}」というレッテルが貼られた。

学校では、『シュテュルマー』を手ごろな視覚教材として用いる教師も少なくなかった。『人種学』という科目がカリキュラムに導入された結果、すでに低学年から似非科学^{えいせ}によって理論づけられたユダヤ人憎悪が吹き込まれた。ユダヤ人生徒がいじめにあっても、教師の多くはやり方を控えることはなかった。ユダヤ人生徒の両親の大部分は同化を果たし、自分は何よりドイツ人であると考えていた。友人たちから交際を断ち切られ、以前は一緒に遊んでいた仲間がヒトラーユーゲントの狂信的メンバーになってしまうのを見守るのは、そうしたユダヤ人生徒にとってつらい体験だった。

『シュテュルマー』の出版社は色鮮やかに描かれた絵本を発行し、まだ幼いドイツ人を筋金入りの反ユダヤ主義者に仕立て上げようと目論んだ。ドイツのいくつもの子供部屋では、本棚は本物の武器庫となった。

一九三六年、『シュテュルマー』出版社は二十一歳のエルヴィラ・バウアーの本『緑野のキツネを信じるな、ユダヤ人の誓いを信じるな』を発行した。書名の中で著者が引用したのは、ユダヤ人を憎んでいたマルティン・ルター⁵⁾だった。熱意にかられた若い女性作家は、文章を書くだけでなく絵も描いた。さし絵の一枚では、おぞましいほど醜いユダヤ人児童の一群が学校から追い出されている。そこに著者は詩を添えている。「これで学校はきれいになります、大きいのも小さいのも、ユダヤ人がみんな追い出されたから。叫んでも泣いても無駄、怒ってもむくれても無駄。ならず者のユダヤ人はいなくなってしまうなさい！」公式な報告によれば、この本の売り上げは十万部を超えた。

エルンスト・ヒーマーの『プードルパグダックスピンシャー⁶⁾』は、ユダヤ人を「野良犬人種」と揶揄した。「ユダヤ人に共通の特徴は、曲がった脚と扁平足です。多くのユダヤ人は鉤鼻で、耳は取手のように突き出しています。吐き気を催させる程の体臭も、彼らが異人種であることを示す特徴です。」ヒーマーによれば、ユダヤ人はその恵まれない素質のせいで誰もが搾取者や戦争扇動者、そして犯罪者に生まれついている。ユダヤ人を滅ぼすのは、それゆえ正当防衛なのである。「世界がもう一度幸福になり、希望に満ちた未来を迎えたいと望むなら、平和を乱すユダヤ人を追い出さなければなりません。そうして初めて、ユダヤ人という野良犬どもの命運は尽きるのです。」

エルンスト・ヒーマーの『毒キノコ』も、恥ずべき古典となった。この反ユダヤ主義的駄本には短い物語が集められ、それらは判で押したかのように、すべて同じ結論へとたどり着く。曰く、どのユダヤ人も人間の姿をした魔物であり、子供たちはみな、ユダヤ人が親切そうな顔をして狡猾^{こうかつ}に正体を隠したとしても、化けの皮を剥がす術を身につけなければならない、と。物語の中で、ブロンドをカールさせた母親は可愛らしい息子にキノコの蒐集を見せながら言い

聞かせる。「『フランツ、ご覧なさい。毒キノコと同じように、悪い人たちには気をつけなければいけませんよ。誰が悪い人間か、人の姿をした毒キノコか、お前は知っていますか?』とお母さんは尋ねました。フランツは胸を張って答えました。「『もちろんですよ、お母さん! わかっています。それはユダヤ人です。先生も、同じことをもう何度も学校で仰っていました。』お母さんは笑いながらフランツの肩を叩きました。「『まあまあ、お前はなんてお利口さんでしょう!』——それからお母さんは真剣な表情になりました。「『たった一つの毒キノコが家族全員を殺してしまえるように、たった一人のユダヤ人は村人や町の住民全員を、それどころか民族を一人残らず根絶やしにできるのですよ。』——フランツは、お母さんが言っていることを理解できました。」

ギンター商会のボードゲーム『出ていけユダヤ人』は、並外れたヒット商品だった。販売者ルドルフ・ファブリチウスは販促状の中で熱狂的に断言している。「このゲームは老若あらゆる層において熱烈に受け入れられています。」事実このゲームは一九三九年の一年だけをとっても、百万個以上を売り上げた。これは、ユダヤ人を家や商店から追い出すサイコロゲームだった。「六人のユダヤ人を追い出せば、文句なしに勝利者だ!」、ゲーム盤ではこういう文句が鼓舞している。ユダヤ人家族の戯画——盗人面をした父親が船員用荷物袋を背負っている——の下には、乱暴な文字で「さっさとパレスチナへ行け!」と印刷されていた。

実際この数年間、数多くのユダヤ人がドイツを去ろうと多大な努力を払った。だがそのためには、彼らを受け入れる準備のある国も必要だった。必要なビザは、しばしば手に入らなかった。それゆえ、当時イギリス保護領だったパレスチナへの移住は、たいいていのユダヤ人にとってほとんど不可能だった。イギリス政府はすでに一九三六年には、アラビア人の抗議によって入国許可人数を著しく制限していた。そして一九三九年、イギリス政府によって採択された「白書」は、次の五年間の入植者数を七万五千人に制限した。

他の諸国の状況も似たり寄ったりだった。これらの国々はどこも、ユダヤ人避難民が大量に流入してくるのを予期し、恐れていた。一九三八年夏、ルーズベルト大統領が呼びかけたフランス、エヴィアンでの会議が議題にしたのは避難民問題だったが、何の解決も得られなかった。参加三十二ヶ国のうち、ある程度の人数の避難民を受け入れる用意のある国は、一つとしてなかった。アメリカでさえ、自国の移民割当制度廃止に着手することは決してなかった。シオニズム運動⁷⁾指導者ハイム・ヴァイツマンはこう述べている。「世界にはたった二種類の国があるだけのようだ。ユダヤ人がそこに暮らすことができない国と、ユダヤ人が入国を許されない国だ。」

一九三八年十一月九日から十日にかけての夜、ユダヤ人に対する暴力はついにエスカレートした。ドイツ全土でナチはシナゴーク⁸⁾に放火し、数えきれない程のユダヤ人商店が破壊され、

略奪された。およそ三万人のユダヤ人男性が警察に逮捕され、強制収容所に連行された——「予防拘禁」、当局は偽善的にそう呼んだ。突撃隊員たちはユダヤ人家庭の住居に押し入り、荒し回った。ゆうに百人のユダヤ人がたった一晩で殺された。このポグロムは国外では戦慄を引き起こした。世界中の新聞が、この夜のテロを第一面で報じた。

イギリスで小さなグループが活動を開始したのは、ほんの数日後だった。十一月十五日、ハイム・ヴァイツマンやラビ⁹⁾長ジョーゼフ・ハーツらを含む幾人かのユダヤ人は、当時の首相ネヴィル・チェンバレンを訪ねた。チェンバレンはドイツで起こっていることに憤激していた。ユダヤ人たちは、少なくともさしあたり、若年のユダヤ人がドイツからパレスチナへ入国する許可を求めた。翌日、イギリス内閣はこの提案を拒絶した。そのかわり政治家たちは、イギリス自らがユダヤ人避難民を無制限に受け入れる準備に取りかかることを決断した。ただし前提条件があった。避難民は十七歳以下——つまり、両親は子供だけを見知らぬ人たちのもとに送らねばならなかった。イギリスは三十年代終わりになってもなお、世界経済危機の残した傷に苦しんでいた。大量失業者の中に成人した避難民の大群を受け入れれば、外国人憎悪が煽り立てられることが予想された。それに対して、迫害された子供や青少年を受け入れることは、政治的により達成しやすかった。彼らは憂慮すべき労働市場において、まだ競争相手とはならなかったからである。

第二の前提条件は、入国する子供一人につき保証料として五十ポンドを、子供の家族、あるいは関係する団体が供託することだった。事は急がねばならず——救援活動は時間との競争だった。児童移送の組織に関わっていたのは、様々なユダヤ人、あるいは非ユダヤ人のグループだった。その中には〈キリスト友会〉、すなわちイギリスのクェーカー教徒もいた。

一九三八年十二月一日、閣議決定のわずか二週間後、最初の一団がベルリンをあとにし、二百人を超える児童が安全な場所に移された。更なる移送すべての出国許可を得るためには、ドイツ当局に情報を提供する必要があるがあった。避難民問題と積極的に関わっていたオランダの銀行家夫人ゲルトルーダ・ワイスミュラー＝メイヤーは、十二月初めウィーンに赴いた。ゲシュタポのユダヤ人専門部局長アドルフ・アイヒマンと交渉し、移送ごとの許可に要する面倒な官僚主義的手続きを簡略化させようとしたのだ。彼女の粘り強さは功を奏した。すぐに、後続の児童移送すべてに許可が下りた。

両親が付き添わなければ子供たちをイギリスへ行かせられる、この可能性はもっぱら口伝えでドイツ国内に広まった。多くの親たちが、何も分からぬ異国の地へと息子や娘を送り出すという重い決断をして、子供らをユダヤ教ゲマインデ¹⁰⁾に登録した。

そうしている間にも、イギリスでは準備に熱を帯びてきた。援助活動に志願した人たちは「ドイツ人児童支援運動」を組織し、それはのちに「避難児童運動」となり、「ユダヤ難民委員

会」と協力して活動した。当初、児童は一人ずつ里親の家庭に預けられる計画だった。だが、避難児童の数は、外国人児童の養育が可能となった数を遥かに上回った。危機的経済状況の中、必死にホストファミリー探しが続けられた。BBCは避難児童の第一陣を取り上げた三十分のルポルタージュを放送し、支援を呼びかけた。新聞各紙もまた、子供たちの窮状を報じた。こうした報道には少なからぬ反響があった。数百人のイギリス人が全面的協力を申し出た。しかしながら支援を申し出たユダヤ人家庭の割合が少なかったために、宗教的に厳格な児童の幾人かはキリスト教徒の家庭に引き取られた。子供たちを迅速に救い出すことが、何よりも優先されていた。

計画を財政的に支えるために、元首相ボールドウィン卿は『タイムズ』紙上で国民に向けて義援金を呼びかけた。これにも目覚ましい反響があった。短期間におよそ二十万英ポンドが寄せられた。さらに、チェーンストアのマークス&スペンサーは避難児童のために衣服と食料を提供し、競売所のクリスティーズは慈善オークションを開催した。

ドイツ当局は、子供が移送列車に座席を確保したことを、たいてい直前になってから両親に通知し——通知と最後の別れとの間がわずか二十四時間しかないことも、まれではなかった。子供たち一人一人が携行を許されたのは、自分自身で持てるだけの荷物、つまりトランク一つと手荷物一つに限られた。さらに十ライヒスマルクの持ち出しが許可された。当然、衣類と靴が何よりも優先され——おもちゃや本を持たせる余裕は、ほとんどなかった。たいていの親は子供のトランクに家族写真を忍ばせ——実に多くの場合、これらの写真は失われた故郷の最後の思い出となった。

駅では愁嘆場が演じられることもあった。両親たちの中には、我が子を手放す覚悟が完全にはできていない者もいた。母親たちはプラットホームでくずおれた。のちには当局によって、そうした親の子供は乗車を拒まれた。人目を引く騒ぎは、なんとしても避けねばならなかった。こうした理由から、移送列車の多くは深夜になってから、あるいは真夜中に出発した。

幾人かの両親はこれが永遠の別れになるだろうと予感していたが、子供たちの多くは政治状況を理解するには幼すぎた。列車に乗せられ両親に最後の挨拶をしようとするのを邪魔されたとき、少なからぬ子供たちは、自分が家族から追い出されたと感じ——その結果、生涯、罪の意識を抱き続けるようなケースも稀ではなかった。そうでない子供たちは目の前の旅を大冒険だと思い、さして悲しみを感じることなく別れの挨拶をした。こうした子供たちは、出発を控えた数日の間、自分たちの両親が重くふさぎ込んでいた理由を分かっていた。

児童移送の出発地は、ウィーン、ミュンヘン、フランクフルト、ベルリン、そして後にはそれにプラハが加わった。もっと小さい様々な駅でも、移送に加わる子供たちがいた。最も一般的だったのは、オランダを横切りフク・ファン・ホラント¹¹⁾に至るルートであり——そこから

子供たちは船に乗ってハリッジ¹²⁾へと渡った。それよりずっと少ないが、ハンブルクからの外国航路汽船でサウサンプトン¹³⁾を目指す避難児童もいた。

列車ごとに五百人にも及んだ児童移送には、ほんの数人の大人しか付き添わなかった。児童移送の存続を脅かさないために、彼らは折り返しドイツに戻らねばならなかった。それゆえ、子供たちはもっぱら自分自身でなんとかするしかなかった。年長の少年少女は、ともに移送される一番年少の子供たちの面倒を見るよう言いつけられた。

イギリスの港町ハーウィッチに到着後、子供たちの多くはロンドンへと向かった。リバプール・ストリート駅の長い木のベンチに腰掛けて、彼らは里親に紹介されるのを待った。数人の幸運な子供は、自分が誰のところへ行くことになるか、あらかじめ分かっていた。それは、両親の友人や知人がイギリスにいるような場合だった。しかしながら子供たちの多くは、誰のところへ自分が預けられるか最後の瞬間まで知らなかった。ほとんどの場合、挨拶は言葉もなく済まされた。里親一家の誰かがドイツ語を話せるのは、ごくまれなことだった。できる限り仕事を急ぐ必要があった避難者組織には、子供を預ける家庭を念入りに吟味する余裕はほとんどなかった。避難児童の窮状を利用して安い労働力を手に入れようとするイギリス人が現れるのも、珍しいことではなかった。実際、子供たちの幸運と不幸を分けたのは、しばしば偶然以外の何ものでもなかった。引き取り手が見つからなかった子供は、いつとも知れぬ解決の時まで、しばらく避難者組織の収容施設で過ごさねばならなかった。

一九三八年十二月から一九三九年八月までの間、児童移送によって、およそ一万人の子供がドイツやオーストリア、チェコスロバキアから救出された。一九三九年九月、第二次世界大戦の勃発によって、救出活動は突然の終わりを告げた。ドイツはその時から敵国となり、すでに移送列車に席を確保していた子供でさえも、ドイツに留まらざるを得なかった。イギリスにいた避難児童にとっても、戦争の与えた影響は大きかった。多くの子供たちは大都市から地方へ移動させられた。そうして彼らは、ようやく順応したばかりの環境から引き離された。十六歳を過ぎた児童移送の子供たちは、いわゆる *enemy alien*、すなわち「敵性外国人」として、イギリスとアイルランドの間にあるマン島に隔離された。こうした隔離の背景には、戦時中ドイツのスパイが自国に侵入するのをイギリス人が恐れていたという事実があり——この不安は少なからぬイギリス人の間で、おかしなほど広まっていた。

しかし子供たちを最も苦しめたのは、両親の運命を何年も知ることができないことだった。郵便物の行き来は戦争によってほとんど中断してしまった。まだ赤十字だけが便りを仲介していたが、それは二十五語を超えてはいけなかった。こうした葉書でさえ、数年に及んだ戦争の間には滞ることがしばしばだった。

それでも、子供たちのほとんどは戦後両親と再会するという希望を抱いていた。もう何年に

も渡って両親から便りを受け取っていない子供ですら、それは戦争の混乱のためだと考えることができた。避難児童、そして世界は、ホロコーストの全容をごくわずかずしか知ることができなかった。百五十万の子供を含む六百万のユダヤ人が、ホロコーストで虐殺された。これまでに両親や兄弟姉妹との再会を果たした避難児童は、ごく少数にすぎない。

しかし多くの母親や父親にとって、少なくとも愛する子供だけは安全な場所にいるということは、最期の瞬間まで、計り知れないほど価値がある慰めだった。エーファ・ハイマンの父マックス・ハイマンは一九四三年、妻に送った最後の手紙で次のように書いている。

「私たちを襲った運命がどれほど恐ろしいものであったとしても、私たちがかわいいエーファは無事でいられると考えれば、私たちの心は安らぎ、この運命を耐えるのもよりたやすくなります。」

彼の娘エーファは児童移送によって救われた。しかし彼自身は二度と娘を腕に抱くことができなかった。マックス・ハイマンは一九四四年二月二十二日、テレージエンシュタット強制収容所で死んだ。

出典

- S. 99 – Zitat aus Elvira Bauer, *Trau keinem Fuchs auf grüner Heid' und keinem Jud' bei seinem Eid*, Stürmer-Verlag 1936, ohne Seite.
- S. 99 – Zitate aus Ernst Hiemer, *Der Pudelmopsdackelpinscher*, Stürmer-Verlag, 1940, S. 61 und 64.
- S. 100 – Zitat aus Ernst Hiemer, *Der Giftpilz*, Stürmer-Verlag, 1938, S. 5.
- S. 100 – Zitat aus Chaim Weizmann aus: *Manchester Guardian*, 23. Mai 1936.

訳注

- 1) 『「ヒトラーのじじいなんか死んじゃえ！」 イギリスへのユダヤ人児童移送（キンダートランスポート）の回想』には、児童移送経験者十一人の回想が収められている。本稿は、同書導入部に置かれた著者アーニャ・ザレヴスキー自身による解説の邦訳である。
- 2) ユダヤ教の口伝律法『ミシュナ』とその注釈『ゲマラ』を編纂して成立した文書。聖書において最も重要な成文律法『トーラー』（『モーセ五書』）とともに、ユダヤ教徒の宗教的および精神的根幹を形成する。
- 3) 一九三八年十一月八日から九日にかけて、ナチによってドイツ全土で繰り広げられたユダヤ人迫害事件。〈水晶の夜〉とも呼ばれる。「ポグロム」は略奪・迫害・虐殺を意味するロシア語。とくに十九世紀末以降、ロシアを中心に頻発したユダヤ人迫害について使われるようになった。
- 4) 一九三三年三月五日の選挙において、ナチ党は単独過半数には届かなかったものの前年以來の第一党の座を維持する。そして三月二十三日には、権力をヒトラー政権に集中させる全権委任法を国会に承認させ、独裁政治の基盤を築いた。
- 5) 宗教改革の立役者マルティン・ルター（1483-1546）は、宗教改革の初期、ユダヤ人がプロテスタントに

改宗することを期待していたが、この期待が裏切られると反ユダヤ主義者となった。その激しい主張はナチス・ドイツによるユダヤ人迫害にも影響を与えた。

- 6) 様々な犬種名を混合させたタイトル。
- 7) 十九世紀末におこったユダヤ民族国家建設を目指す運動。
- 8) ユダヤ教の会堂であると同時に、ユダヤ人の社会生活等の中心。
- 9) ユダヤ教の指導者。
- 10) ユダヤ人（教徒）の信徒団体。
- 11) 現在はロッテルダム市に編入されたオランダの港湾都市。
- 12) イギリス、エセックス州の港湾都市。
- 13) イギリス南部の港湾都市。

テキスト

Anja Salewsky: *»Der olle Hitler soll sterben!« Erinnerungen an den jüdischen Kindertransport nach England*, List Taschenbuch, München 2002, S. 9–23.